援農ボランティアを語る

ー食料生産と消費者交流の想いー

山田嗣夫（岡山県農業共済組合連合会 OB）

私は、久米郡美咲町で農家として日本国民への食料供給に励んでいます。耕作面積は、水稲６８アール、ピオーネ１１アール。生産物販売額は、うるち米６４万円、ピオーネ８７万円です。設備投資が大きくて農業経営部門は赤字となっています。これから先も､何年間も赤字経営が続くでしょう。でも、農業経営は足が痛くなっても動ける限り続けます。「損だ、得だ」と言わずに「徳」を求めて働くのです。小規模経営だから赤字が出ても破産しないで済みます。年金をあてて「徳」の食料を生産するのです。今年の６月からは満６３歳なので厚生年金受給者です。これから先の生活は、農作業や集落ボランティアをするなり、知人を訪問したりしながら長生きをしたいと思います。

さて、「援農ボランティアを語る」との大それた標題なのですが、話の程度は小さなものでありますから期待しないようにお願いします。この標題を掲げた理由は、消費者に食料生産の現場を見てもらって、いずれは理解してもらって、食料の価値を見いだしてもらって、それなりの値段で消費してもらう。この一連の行動展開をするために「援農ボランティア」の名称を借りて消費者との交流がしたいからです。

さてさて、援農とは「農作業労働を手伝い、助けること。また、特に有機農産物の直売などで消費者による生産状況の理解と農業体験、労働不足の補いなどのために消費者が農作業を手伝うこと」とのインターネットの検索でした。私の農園で大忙しの農作業は、ピオーネの果実がぶらさがる枝の手入れと、果実の袋かろけです。この農作業を「援農ボランティア」にすることにします。「援農ボランティア」の募集は、知人に私からお願いしようと思っています。イベント的に消費者を招いて接待まですることは､かえって私の負担になるので、あくまでもボランティアで手伝ってもらうのです。ピオーネづくりを知ってくださったお礼は、収穫時のピオーネ宅配便とします。一戸の農家が一戸の消費者と交流するのです。

ちょっと寄り道をしまして、岡山農林水産統計年報（平成１７～１８年）によると、県内集落数４，５５９カ所のうち、地域資源を生かした交流事業に取り組んだ集落は１,１０８カ所であります。そのうち、農林業ボランティアを介した交流が１４カ所です｡もちろん事業実施数でありましょうが、その数は少ないように思います。

それで、山田農園に来てくださったボランティアの人が「やっぱりピオーネは手がかかるんだ。だから、一房が７５０円もするんだ。なっとく、なっとく」「植えとけばひとりでに成るんじゃないんだ。今日の作業のほかにもいっぱい世話をせんといけんのじゃなあ。チョンボ（小型ユンボ）で木の周りを掘って、腐葉土やピートモスや化学肥料や微量要素を入れて根を張らせるのか、そこまでしょうるのはしらなんだ。なるほど、なるほど」と言ってくだされば

幸せなのです。私の本音は、品質の高い立派なピオーネを生産して、知人に「自慢話」がしたいのです。

またまた、ちょっと寄り道をしまして、退職したことによって地域の世話の係りを引き受けざるを得ないことになった現状です。「山田さんは、今まで不義理をしとったんじやけん、これから先は、役をしてもらわんといけんで」の一言でした。大字の役、中山間地域支払の役、水利組合の役、常会ボランティアの役など、結構多忙なのです。

農家の皆さんは、足が痛くても働いておられます。私もそのようにします。今のところ元気なので牛の電牧張りも手伝えます。「援農ボランティア」ができますので、声をかけて下さい。「ピオーネ自慢話」を持参したいのです。私が「援農ボランティア」をたのんだり、たのまれたりする始期は、今年の６月です。決意を表して筆を置きます。